

下総町の歩み



空から見た現在の下総地区



下総町役場が完成(昭和31年)

平成18年3月27日に成田市と合併した下総町(現成田市下総地区)は、利根川に育まれた豊かな水田と自然に恵まれた地域です。今回は下総町の歴史を紹介します。

下総町の誕生と発展

関東地方で唯一、自治体名に奈良時代の旧国名が付く「下総町」は、昭和30年2月に滑河町・高岡村・小御門村の3町村が合併して誕生しました。当時の人口8、109人でのスタートでした。

初代町長となった岩立源一郎氏は、限られた予算の中で、役場庁舎の建設、産業道路の開発、下総中学校の開校、診療所・公民館・町営住宅などの設置を責務に掛けました。昭和31年に新庁舎が完成、昭和33年に下総中学校が完成するなど、新しい町の基盤が整備されていきました。

また、単独では容易に実現できない施設の設置や事業を周辺市町と共同で行うため、昭和40年8月、佐原市(現香取市)、大栄町(現成田市)、神崎町などと北総西部広域行政連絡協議会を結成しました。昭和44年には6市町が協力して広域消防組合が設置され、翌45年4月に西分遣所が開所しました。

昭和41年に成田国際空港の建設

が決まると、下総町でもさまざまな事業に着手しました。道路の改修工事のほか、滑河小学校をはじめとする、町内全ての小中学校を防音校舎に建て替えました。

利根川と常総船橋

下総町は、江戸時代から利根川の水運に支えられ栄えた地域でした。対岸との行き来にはもっぱら渡し船が利用され、多くの渡船場がありました。

昭和42年12月、滑川渡船場に、鉄製の船20隻を連ねた上に鉄板などを渡して橋にした「常総船橋」が開通しました。

この橋は、延長263メートル、幅4メートル。徒歩は無料ですが、自転車は10円、普通乗用車は120円の通行料金が掛かりました。

また、毎年6月15日から10月15日までの増水期には取り外され、代わりに渡し船が運行されました。

昭和54年の常総大橋の開通とともに、常総船橋と渡し船は全て廃止され、姿を消しました。

Narita Chronicle

「下総町の歩み」

昭和30年2月	滑河町・高岡村・小御門村が合併して下総町が誕生
昭和31年3月	役場新庁舎が完成
昭和33年3月	下総中学校校舎が完成
昭和49年6月	町章が制定
昭和50年4月	町共同利用施設が完成
昭和54年2月	常総大橋が開通
昭和60年1月	保健センターが完成
平成4年 5月	町民バス「もくせい」運行開始
平成5年 3月	「下総町民憲章」が制定される
平成7年 1月	ニュージーランド・フォクストンと姉妹都市を締結
平成8年 5月	フレンドリーパーク下総オープン

利根川を渡し船で横断
(昭和30年頃)



船の上に板を渡した「船橋」



ニュージーランドからの親善大使と交流



常総大橋が完成
(昭和54年)

国の重要文化財

滑河観音の名で親しまれている龍正院は、平安時代初期の承和5(838)年の創建と伝えられています。重要な文化財が多く残されており、中でも室町時代文亀年間(1501～1504)に再建された仁王門は、桃山期の建築様式として国の重要文化財に指定されています。



国の重要文化財である仁王門

質の高いレンコンの産地に

下総町は昔から早場米^{はやばまい}の産地として知られていましたが、国の減反政策がきっかけで昭和62年、野馬込地区の4戸の農家でレンコン栽培を開始しました。

利根川を挟んだ向こう岸は、全国一のレンコン生産量を誇る茨城県。栽培に向かない強酸性の土壌など不利な条件を乗り越え、独自の土壌改良とたゆまぬ努力で、色が白く、栄養価が高いレンコンの栽培に成功しました。

さらに、栽培方法を組み合わせることで、年間を通して出荷できるようになり、市場を意識した販売戦略などに積極的に取り組みました。その結果、平成12年には日

本農業賞大賞(集団組織の部)を受賞するまでに。町の特産品としてブランドを確立しました。

ホームステイ交流で人材育成

平成3年、「ふるさと創生」事業の一環として、国際感覚豊かな人材を育成しようと中学生海外派遣事業が始まりました。

カナダやニュージーランドなどでホームステイが実施され、平成7年には、ニュージーランド・フォクストンと姉妹都市の協定が結ばれました。

同市とは合併後も、友好都市の一つとして、青少年のホームステイ交流などを通して、親善を深めています。